
未来携帯物語

楠木あいら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来携帯物語

【Nコード】

N1482U

【作者名】

楠木あいら

【あらすじ】

浮遊する人工知能付き球体の携帯電話が存在する、ちょっと先の未来物語です。

異なる星から来た爽さわは、自分をも巻き込むバイトを始める。

自分のHPに掲載していましたが、少し手直しして、載せる事にしました。

異星人のバイト

1. 異星人のバイト

少し先の未来。こんな携帯のコマーシャルが流れるようになった。

「電話にメール。ネット。カメラに、目覚まし時計に、スケジュール。」

今や、携帯電話はあなた専用の秘書です。

その秘書をもつと親密に、有能にしてみませんか？

新しいBKV-465は、何と世界初浮遊携帯電話！

しかも、最新人工知能搭載。完全入力機能だから命令するだけで

OK。もう、操作で悩むことはありません。

自動移動機能があるから、携帯を落とすこともありません。

もう、携帯電話は、あなたの生きた賢い執事です。」

CMに出ていたのが人気アイドルだったせいか、浮遊携帯電話は爆発的な大ヒットとなった。

それから、しばらくの時が流れ、浮遊する携帯電話は、異なる星人でも使えるようになった。

ただし、偽りの書類や証明書を使って異なる星の人達は住んでいた。この星に異星人はいない事になっているから。

早朝

赤い球体電話、愛称ホオボスはふわりと浮き上がり登録した主人、爽さわに着信を告げる。

「マスター。応見おつみさんから電話です。」

「……、……。」

今日は休み開けの月曜日。しかも（携帯の）目覚まし機能すら作

動しない時間に、応見からである。

赤い球体内に映し出されるのは美少年といっても過言ではないが、爽にとつて彼ほど、うんざりする相手はいなかった。

「おはよーございます。上司様。いかがなさいましたか」

爽は赤い球体に向かってあいさつをした。浮遊する携帯電話は着信があれば、自動に主人のいる所へ移動してくれる。

「目覚めたばかりで、言葉遣いの悪さ仕方ないものだな」

「わざとに決まってるでしょ。人の安眠を妨害して」

「爽が起床する六時5分前。モーニングコールだ、ありがたく思え」
顔は整っているが性格が悪い。爽が彼に好意をいだかなくてすむ一番の理由である。

「思わない」

爽は携帯の中で映像化された冷静沈着な応見を睨んだ。

ちなみに未来の携帯電話はすべてテレビ電話機能があり、さらに3Dも可能であった。

「それはそうと応見。何で人の起きる時間まで知っているのよ…」

「管理者だから。通学距離と爽の性格を考えれば予測はつく」

「さすが、レベルの高いロボットだけあるわね」

平面映像とはいえ、性格の悪いロボットをこれ以上みたくない爽はふとんを頭からかぶった。

浮遊する球体電話がある未来。異なる星人がいればロボットも存在する。

ロボットであるのにもかかわらず、応見が学校に通う理由は爽をはじめとする星の違う生徒を管理するためであった。

とある目的のため

とある目的のためではあるが、爽にとつて応見は小遣い稼ぎにな

る職をくれる存在であり、頭が上がらない存在でもあ

った…。

「で、仕事の内容は？早朝叩き起こさなければならぬほどの急用なのはわかるけれども」

「ああ。急用だ…休養とも言えるが」

「？」

「爽。今からCエリア48地区に向かってくれ。そこで指示に従いながら、しばらく滞在することになる」

応見が放った仕事は遊び盛りの女子高生にとって、衝撃の大きなものだった。

「え？滞在？それって学校行かなくていいの？」

「長くなればそうなるな」

応見の返事に、爽は今までもぐっていたふとんを跳ね上げて立ち上がった。

「やるやるやる。絶対にその仕事引き受けるからね」

わかりやすい反応に、奴は鼻で笑いこぼした。

「まあ、頑張りたまえ」

「即、C-3Sエリア駅に向かってくれ。荷物は携帯以外持たないように。長くなるならば、向こうで買い揃えればいい。」

駅までの経路及び、細かい指示はメールで送っておく。必要経費も口座に振り込んでおく」

ここでいう『必要経費』というのは電車代にあたる。

改札口で携帯電話を通して自分の口座から電車代が支払われ、自動販売機や店の買い物も携帯一つで精算すること

ができるのは当たり前前の時代になっていた。

「まあ、たたく、便利な時代になったわよね」

「電車内も、オフラインモードにすれば浮遊可能ですし」

人工知能もあるから命令するだけで下手な操作知識もいらぬ。
老若男女すべて楽に使えるのだ。

「それはそうとマスター。どう思います？」

見知らぬ景色をしばらくながめていた爽は、携帯電話の問いに口を開いた。

「遠くて、長いわね」

これから一人と一台が向かうエリアは、都心を離れた海の近くにあつた。

通勤時間帯はさすがに混雑していたが、ピークも過ぎた今は空席が見つけられた。

異なる星から来た爽は、バイトと称して応見からさまざまな仕事
がまわってきた。

異星生物の退治、回収。学区内のボディガード。危険とはいえ
爽には好都合な内容であるが、どれも徒歩ですむ範

囲内である。

「とはいえ、素直に学校を休めるんだから。仕事に専念するだけよ」

「プラス思考はよい事です…でも、少し樂觀すぎませんか？」

「そう？」

不安を口にした携帯に耳を傾けるべきだと、爽は後になって気付いた。

後悔という言葉が頭に浮かんだのは、メールに書かれたマンションにたどり着き、扉を開けた時だった。

指定された部屋の中には、一人の少女がいた。

赤色のいかにも高そうなソファで気持ちよさそうに眠っている

子は。

爽に似ていた。

いや、まったく同じだった。

バーチャルライフ

「……………」
1LDKだが高級な部屋にいる同じ姿の少女に、爽はただフリーズしてしまつたが、我に返ると少女のいる部屋から離れ、台所のすみにしゃがみロボットでありバイト先の上司でもある応見に電話した。

ちなみに通話スタイルは、球体携帯電話を両手にもって話しかけるようなもの。水晶を持った占い師が語る様な感じで。

「ちよつと応見。何なのよ。悪趣味ないたずらも度が過ぎているわよ」

眠っている子に聞こえないようソファーの様子を伺いつつ、爽は小声で抗議した。

「列記とした仕事だ。」

『バーチャル・ライフ』というものは、知っているだろう」

バーチャル・ライフ

登録された主人と会話できて、浮遊する携帯電話がある時代。操縦席に乗って、一体のロボットを動かすことができるようになった。

ただし『バーチャル・ライフ』は巨大なロボットではなく、人間サイズのロボット。遠隔操作なのでロボットの中に入るのではなく、ラジコンのように動かせる。

視覚や聴覚などはロボットと同じに実感できるから、違う人間になりきって現実世界を生活できる。リハビリや引きこもりとかの心理療法に使われているという。

「という事は…」

「あれは爽をモデルにして作られたロボットだ。」

そして、そのロボットの世話、護衛をするのが今回の仕事だ」

これが『仕事』と聞いて爽は混乱を覚えたが、黙っている爽ではなかった。

「どーして同じ姿なのよ」

「操作する『御方』が狙われているからだ」

「……………。狙われているって、ここにいるのは、遠隔操作しているロボットでしょ。何かあっても…」

「そういうわけにはいかないんだ」

応見は最後まで聞かずに否と答えた。

携帯電話内に映し出される彼の顔に表情の変化というものは、当然ながら見ることはできなかった。

「この御方は、表向き消息不明になっている。第一、狙われること事態、精神的に大きな負担となる」

「それ、どういう事よ」

「二度は言わない。それ以上の情報も言わない」

球体内に映る応見の顔からして、通話を終了したがっているのはわかっていたが、爽はとある事を慌てて聞いた。

「まさか、遠隔操作している子って紅子（こうこ）じゃないでしょうね」

「こつちの周辺があわただしくなってきた。緊急以外にかけないよ
うに」

爽の問いに答える事はなく、球体内から応見の姿が消えた。

「…んあつ。つたく、もう」

的を射た発言と考えていいほど、冷静な応見らしい逃げ方…の様に思えた。

紅子

爽と同じ星から来た同じ高校の同い年の子である。

彼女は爽と違い『特別任務』をするために来たエリートであり、爽は彼女の補欠として地球にいた。

その紅子を最近、見かけていない。同じ星出身の同じ目的で生活

しているが、友達と呼べる仲ではないので、何日も見かけなくても、気にかけるものではなかったが。

「マスター。そのロボットを操縦しているのが、紅子さんではないかと、推測しているんですね」

話を読める携帯電話は、そう発言していただろう。

しかし、その声が耳に届くことはなかった。

「……………」
「それもそうだろう。眠っていた『そっくりロボット』が目を覚まし。」

爽の真後ろに立っているのだから。

まるで鏡を見ているようだった。

爽にとって毎日見慣れている自分が自分の意思とは関係なく動き、同じ目で見つめているのだ。

「……………」
「やあ……………」

爽は何ともいえない不気味さに声を出して逃げ出さなくなったが、何とか押しとどめ、勇気を振り絞って立ち上がった。

「私、茶果木爽さかき さわっていうの…あなたは？」

立ち上がると、寸分の狂いもないところに同じ形をした目と合う。同じ姿をした者に表情はない。

バーチャル・ライフで遠隔操作されるロボットの表情は人間と変わらない。

さらに、難しい操縦方法はなく、操縦席に入って腕をあげれば遠く離れたロボットも同じ腕を同じ高さまであげる。足を早く動かせば、歩き、走る。笑えばロボットも笑う。

だから、ここにいるロボットが笑わないのは、操縦する者が無表情だからとなる。

「……………」
「……………」
操縦する人がしゃべろうとしなければ、目の前にいるロボットの口が動くことはなく。

爽と一体は長い間、同じ姿を見続けていた。

爽はか『こちらから話しかけてよいのか』と思い始めた時、ようやくロボットが動いた。

『紅子…』と

わずかに開いた口からそう出てくると…。

ロボットは、支える力を失いその場に倒れた。

「ととと…」

爽が持つ地球離れた腕力と反射神経がなければ、重いロボットは大きな音をたてて床にぶっかったことであろう。

「マスター…」

ふわりと浮かび上がった球体電話は、同じ姿をしたロボット抱きかかえる主人を不安げに見つめた。

「さあてと、これからどうなるんでしょうね」

爽は携帯電話に苦笑したから、残りの言葉を吐き出した。

「やっかいな事件になるのは確かな事ね」

どこか知らない所で遠隔操作できるロボット。私と寸分の狂いもないそのロボットの世話と護衛をする。これが今回の仕事だった。

見知らぬ海近くの町で。

携帯電話と推測

「…ただより高いものはない。学校休めるほど甘い仕事はないって所よね」

爽は浮遊する携帯に向かって小さな声で愚痴をこぼした。

「今回は、ずいぶんと濃い霧がたちこめていますね」

浮遊する赤い球体型携帯電話はずいぶんと面白い表現で例えた。

「そうなのよね。ほんと？ びっくりよ。ロボットを遠隔操作する人もわからないし」

「紅子さんじゃないんですか？」

携帯電話の問いに爽は自信を持って首を横に振って否定した。

「それはないわね。電話で遠隔操作する人を応見は『あの御方』って言ってたから。」

いくら、紅子が特別任務に選ばれたエリートであっても、応見から見れば呼び捨てできるただの高校生。応見の呼び方はワンランク高い位置にいるのは間違いないわよ」

「そうですか…となれば、遠隔操作する人が言った『紅子さん』については、どう考えていますか？」

携帯電話の問いに、爽は首を振った。

「わかんない。」

紅子を知っているのは確かだけれども」

「マスター。マスターは紅子さんが最近見かけないと申してましたが、もし。紅子さんが何らかの事件に巻き込まれて、行方不明になっていたとしたら…。遠隔操作をする人は、紅子さんの居場所について何か知っている…ってことになりませぬ」

携帯電話の考えに、またしても首を振った。

「ホオボス君（爽の携帯電話の愛称）。それは考え過ぎよ。ここ何日か紅子を見ていないだけで。彼女が行方不明になっている証拠はないし。何かの事件に巻き込まれたところか、何か事件が起きた噂

すら聞いていないのよ」

「そうですか。すみません。どうも考えすぎたようで」

フォボスは簡単に自分の間違いを認め、謝罪した。間違いを認めない人間に爪の垢を飲ませてやりたい正直さが携帯電話にはプロگرامされている。

「でも。何か関わっているのは間違いないわね」

床に座り、最高級のソファに背を預けている爽は、そこで静かに寝息をたてる少女を見上げた。

家族構成に『双子または三つ子以上の兄弟』というものがいない者にとつて、同じ姿が近くにあるのはどうも落ち着かないものであり、爽も例外ではなかった。

「見れば見るほど妙な気分よ」

校則違反ぎりぎりの茶色の髪を左右に分けて三つ網し、中華風にまるめた髪型も、凹凸のあまりない体格も。

どこをどうみても、違いのない少女ロボット。でも、どこかの別人が動かしている。

「スリーサイズ、一ミリの狂いもなかったら、嫌だなあ」

「でも、誰がマスターのサイズを知っていたんでしょかね……」

「……………」

爽のバイトおよび学校内の細かい管理をするのは嫌な冷血野郎、応見のただ一人しかいない。もちろん、応見に寸法なんて言った覚えすらないのだが。

「もしかして、応見さんは精密なロボットだから、外見からでもマスターのサイズを測れるんでしょうか」

「恐ろしい事を言わないで」

携帯電話のありえる話に、頭をかかえるしかなくなった…。

なんともいえない奇妙な気分だが、少女ロボットが動かない限り変化のない平穏な空間であった。

その、妙な気分は長いこと続いた。

というのも、彼女、爽と同じ姿をしたロボット操縦者は一向に目を覚ます気配がなく、ロボットも眠り続けていた。

それは、一時間たつても日が沈んでも。

爽は応見が用意したと思われる冷蔵庫に保存してあった冷凍食品をレンジにかけ晩御飯を済ませた。

風呂に入つて、寝る時間になつても。

ずーっと彼女は眠り続けていた。

「この子。大丈夫なのかな…」

「念のため、応見さんに報告した方がよろしいんじゃないですか。極力、電話をしないようにとおっしゃっていましたが、メールでも送っておきましょう」

「そうね。そうしてちょうだい」

未来の携帯電話は執事のように助言をして、メールも勝手に出ししてくれる。

とはいえ、本文は爽が考えなければならぬ。

「押入れの中に布団があるから…彼女を寝かせて、私はソファの方がいいわね」

いくらロボットとはいえ、金をもらつて彼女の世話をする以上、布団に使う気になれない爽であった。

「でも、マスター。大丈夫なんですか？」

「何が？」

「私、気になっていましたが。このロボットを操作する方って、女性とは限らないのでは…ないでしょうか」

…

爽から表情が消えた。

昼間『紅子』とつぶやいた声は、ロボットに組み込まれた爽の声であり、爽と同じロボットを操縦しているもの声ではない。

なので、ロボットを操作する人が下手したら男だつて事もありえるのだ。

「…え。じゃあ、見知らぬ男と一つ屋根の下で寝泊りするって事」

「…。いや、大丈夫ですよ。何といつても応見さんがまわして来た仕事なんですから。安全です」

携帯の返答はフォローにはならず、爽は頭をかかえた。

「どくしよ。」

でも、まだ。男だと決まったわけじゃないし…。

もし、男だつたとしても…護衛する以上、何かあつた時、駆けつける範囲じゃないとならない」

「マスター…」

「……………」

さんざん悩む爽であつたが…睡魔の力に『もう、どくしよでもなれ』という気分陥つた…。

とりあかず、携帯フォボスに『ロボットに動きがあつたら、即刻、起こして』と命令してから。

ソファーに身を預け熟睡モードに入った。

目が覚めた時、爽の目の前にいたのは赤い浮遊する球体型携帯電話フォボスだつた。

「おはようございます。マスター。朝の7時です」

「……………」

寝る前の心配はいらなかつたようだ。

「ロボットは？」

「まだ、眠っています。マスターが寝ている間、一度も起きることなく」

「そつ…」

無事、朝を向かえたものの、爽の気分は表情は暗く、携帯電話に

も読み取る事ができた。

「どうしましたマスター。お顔がさえませんね」

「嫌な夢を見たのよ」

「嫌な夢」というと、笑いながら応見さんが追試テストを山ほど持って追いかけて来る夢ですか」

「…。その夢も嫌だけれども。(どうやら何度も見ているらしい…) 今回ののは、そんな単純な夢じゃないのよ」

爽が見た夢は、紅子に会うものだった。

「夢は一日の情報を脳が整理するためのものといわれていて『紅子』というキーワードも記憶整理の一つと考えることもできた。

そんな夢の中で紅子は、爽に剣を向けていた。

刃の上には高級そうな卵型の物体が乗せられていた。

「それだけの夢だけれども…」

「残念ながら、私には夢判断するプログラム設定はありませんので、マスターの夢の意味を知ることとはできませんが…今あるプログラム内で推測するには、剣を向けることと、その卵に意味があるとおもいますね」

携帯電話の返答に爽は苦笑した。

「鋭いわね、ホオボス君。剣はわからないけれども。卵は『特別任務』で手に入れるものよ」

特別任務

様々な星の選ばれた者だけが行うことができる任務。

その任務もすべの星が参加できるわけでもない。非常に限定されたものだった。

特別任務に参加できるのは星は順番に一星一人ずつとなっていて、よほどの事がない限り、特別任務に決められた星内での入れ替えはなく。次の星に特別任務権が移ってしまう。

限られた星。選ばれた者だけが挑むことができる特別任務

しかし、その任務内容は、比べ物にならないほどに単純なもので

あつた。

それは、

『ある人の家に行つて、卵型のあるものを奪つてくる』
ただそれだけ。

でも、卵型のそれは、地球以外、すべての星にとって喉から手が
出るほど手に入りたい物で、もちろん宇宙にたった一つしかない。

それが特別任務というものだった。

「だから、特別任務に選ばれた子とそうでない子の差は歴然だし、
ましてや、紅子は近づけないオーラがたちこめているからね…仲良
しにはなれないよ」

身支度を整えた爽は、朝食の用意を始めた。ロボットは目を覚ま
す気配はないし、覚ましたとしても、人間の食べ物を処理できな
いと思うから、一人分。

小型の冷蔵庫を開けると卵と牛乳。マーガリンなどがあつて、あ
とは缶詰とかの既製品が隣の棚につまっていた。

爽はそれらを取り出しながら、携帯に身の上話を続ける。

「私にみたいに特別任務の補欠ともなれば、ただ学校に行つて生活
するだけ。応見が仕事をくれなかったら、本当にやることなんてな
いわよ」

「マスターにとって応見さんは、恩人なんですね」

「……」
浮遊する携帯電話の言葉にうなづきたくないけれども、否定はで
きなかった。

「……」
爽は牛乳をコップに注ぐと一気に飲み干した。

「……。まあ、応見の存在はありがたいわよ。」

ましてや特別任務に選ばれたエリートと、補欠の接し方に差別は
ない…というより、誰に対しても見下ろした態度で接してくれるだ

けなんだけれどもね…。

「とはいえ、肯定したくないわね。あの冷血サディスト野郎なん…」
「ほお…。恩人に向かつて良く言える言葉だね」

携帯電話から放たれる声を聞いて、フリーズしたのは言うまでもない。

『マスター…私は、何度となく着信を告げました事を報告しておきます』

最悪な事態を察知した携帯電話は、自分の球体内にメッセージを表示させから、冷笑する応見の姿を立体映像化させた。

「…。ははは。応見様。ご機嫌麗しゅう」

「爽の二重人格については、後で言わせてもらうが」

『重要な話で電話したんだなら、忘れてよ』と、声に出さず訴える爽であった。

「ロボットの様子はどうだ」

「寝てばかり。」

で、応見君」

「お前の聞きたいことには一切答えない。」

「そうか、眠りつつづけているか」

「私はどうすればいいの？」

「爽はロボットの世話と護衛をする事だから。ロボットが起きるまで、待機だ」

「え…。何もできないの？」

「退屈ならば、爽が受けるはずだった昨日の授業内容と、宿題。予習、復習をメールで送っておく。めいいっぱい、頑張れ」

「いーやー」

「ならば、大人しくしている。」

「いいか、爽。訪問者が現れても絶対に入れるな。誰であろうと。役職を使ってくるならば、俺の名前を使え。」

「いいな。絶対に入れるな」

念を押して、通話は終了した。

ロボットの睡眠は24時間続いた。

途中、目を覚まし起き上がることはあるものの、左右を見まわして再び眠ってしまう。

「……………」

応見に注意された訪問者も現れることなく、待ちつづける者にとつて『暇』以外なんでもなかった。

「マスター。暇を持ってあそばしているならば、携帯のゲームをダウンロードしますか？それとも。ネットワークにつなげますか？」

未来の携帯電話にも、アプリやウェブ能力はあり、気を回してくれたが…。

「うーん、そんな気分にはなれないな…」

ロボットがようやく動き始めたのはもう一晩必要だった。

『いい加減飽きてきた』と愚痴をこぼしながら朝ご飯を用意しようとしていた時、それはゆっくりと起きあがった。

またしても左右を見まわし、眠ってしまうかと思っていたけれども、ロボットはとうとう立ちあがった。

「……………」

爽と同じ姿をしたロボットは、辺りを見回して

爽に視線を向けた。

「おはよう。爽、さん」

ロボットから放たれる爽と同じ声。ロボットがとうとう起きたことに緊張する爽にさらなる緊張を与えた。

「お、おおはようございます」

ロボットは、緊張し硬直する爽の前まで近づくと、微笑んだ。

「こんな姿でごめんなさいね。驚いたでしょう」

爽と同じ姿、同じ声であるのに。そのロボットのものは爽とは違う。どこか大人びたものがあつた。

「…。ええ。まあ…。さすがにびっくりしました。

あの、ところで何と呼べば…。いいんですか？」

ロボットは、爽の正直な返答に苦笑してから、更なる問いに天井を見上げ思索した。

「そうね…。あなたは爽さんだから、爽子でいいわ。よろしくね、爽」
差し出された手を握るとロボット（爽は応見の肩を叩いた事があ
るからわかる）特有の冷たい感触がした。

「こちらこそ」

ロボットと握手をした瞬間、爽の新しい仕事は、ようやくスタートをきった。

海

「爽：海に行きたい」

爽子は、朝ご飯を食べる爽を観察しながら、ぼつりと言った。

視線は爽に向けているものの、彼女を見ているようには思えなかった。

目の前にいる爽を通り越して、どこか遠い世界を見ている。そんな感じがした。

『警戒を怠なければ』と、応見から許可がおりたため、二人の同じ姿をした者たちは、外に出た。

爽にとって初めての町であり、どこをどう行けば海に着くのかわかるはずもなかった。

しかし、ここは未来であり、未来の携帯電話がある。『海まで案内して』と一言命令すれば、問題は解決することができた。

「マスター、その先にあるスーパーを右に曲がって500メートルほど進んでください」

あとは携帯が車のナビゲーター同様、主人の歩行速度に合わせて丁寧に教えてくれる。

「何か、おいがする」

「磯の香り。海のおいででしょう。私は携帯なので、海の近くにいるから『磯の香り』と判断しているだけです」

爽は爽子に問おうとしたが、実行することはなかった。

「……………」

爽子に表情というものがなかった。

人形のような顔と目を持つ爽子の心は深い見えない所に沈んだまま、浮上する様子はないようだ。

だから、角を曲がった途端に現れた広大なる海を目にしても無感情なままだった。

今の彼女にとって大きな駐車場を見ているのと変わらないだろう。
「ほら、爽子さん、海ですよ」

一人の世界に入り込んでしまった爽子に、この声は聞こえるのか不安になったが、爽は指を伸ばし、爽子に知らせた。

海

違う星から来た爽にとって、湖よりも大きな水の存在は、ただ「すごい」以外、言い表しようがなかった。

「……壮大なる水たまり……」

「マスター。水たまりは、ちょっと……」

ただ、ただ驚く爽であるが、そこは仕事人。周囲の警戒は怠っていない。

爽は大きな海と砂浜という、何の障害物もない場所は、敵側にとって狙いやすい場所となり、不安をげに再度辺りを見回した。

「……」

そんな爽の警戒を知ってかしらずか、警備される本人はというと波に触れる一步前（ボディは防水加工になっているから水に触れても問題はない）で止まり、その先にある大自然をぼうつと見続けていた。

「……」

感情を回復しようとする気配はなさそうだ。

爽は周囲を警戒しながらも、腰を下ろした。

「……」

海の音。波には癒しの力がある。それは、海を知らない爽でさえも、耳から聞こえてくる音に安らぎを感じ、仕事でなくても、ここにずっと座っていたい気分になった。

「……」

爽子が振り替えなければ、爽も波を永遠に見続けていただろう。「どうしました？」と、聞きつつ爽は立ち上がり、辺りを伺った。今のところ、怪しい気配は感じ取れない。

「……」

爽と同じ姿をした爽子は、ただじつと爽を見つめていた。相変わらず無表情のままだが、その目には、先ほどにはない、力があつた。

爽子はしつかりと爽を見つめ、唇を開いた。

「……………」

……………」

……………」

信じていいかしら」

長い沈黙が続いた後、彼女はそう聞いた。

「……………」

「あなたの事。信じていいかしら？」

爽は聞き返そうとしたが、それよりも早く、ぐらりと体制を崩した爽子を抱き止めた。

抱き止めた時に伝わってくる冷たい感触。

爽と同じ姿をした得体のしれない者は、深く、冷たい。

暗い孤独

それがロボットから放たれていた。ロボットを遠隔操作する彼女の心そのものなのかもしれない。

「……………」

爽は腕に力をこめた。

爽子から伝わってきた孤独の感触を知った時、爽は言葉を放つていた。

「大丈夫です、爽子さん。」

「ここには、私があります」

同じ姿をした他人。

だが、他人であるが同じ姿をした者であり、爽は、その者の孤独を埋めたくなくなった。

「大丈夫です。あなた一人ではありません。」

「ここに、私があります」

他人であっても、爽には他人のまままで終わらせたくなかった。

「…。

信じていいのね」

「信じてください」

爽の返答に爽子は目を閉じた。

そして、鳥や小動物が安全と判断した大木で休息をとるように。

彼女は、その身を完全に預けた。

「信じてください」

こうして私は木になった。大木にはほど遠いけれども。

この日以来、この人の大木になりたいと強く思うようになった。

私と同じ姿をしたロボットを遠隔操作する爽子さんはどんな人なのかわからない。

口調は年上つぽいけれども、何才、何十才離れているのか、男なのか女なのか、地球の人なのかすら。

でも、今の私には関係のないことだった。

爽子さんのためにやりたい。それ以外の考えがなかったから。

逃走

海の一件以来、爽子は僅かに表情を取り戻してきた…と、爽には思えた。

このまま、ゆっくりと時が流れていけば爽子さんは元気になるだろうと、爽は考えていた。

爽の浮遊する携帯電話、ホオボスが着信を告げる直前まで。

「爽、今すぐ部屋を出る」

球体電話内に映った応見は、用件だけを告げ、事の異変を表した。「俺が許可するまで市外に出る」

「一体、何がどうしたっていうの？って、応見、何、その顔」

爽が驚くのも無理はない。球体内に映し出された応見の顔はところどころ黒ずみ、右の頬にいたっては、皮膚が破け、鉄色の肉がむきだしになっていた。

「ちよつと油断しただけだ。」

爽、よく聞け。檻に閉じこめたはずのモンスターが逃げだした。

そっちに向かうのは間違いないだろう」

「モンスターって…」

「俺も修理が終わればすぐに向かう。」

いいから、さっさと逃げろ。俺以外は敵と思い、決して近づくな。それと、怪物たちを見るまで連絡するな」

返答よりも早く、通信が途絶えた。

「爽子さん」

とにかく、緊急事態なのは間違いない。

爽は、爽子の手をとり、部屋を出て、駅に出た。

財布代わりになる携帯電話が一台あれば、二人でも改札は入れられるを確認して、爽たちは駅に向かった。電車の力を借りれば町から簡単に離れられる。

「爽子さん大丈夫ですか？」

逃げることを告げた時、再び爽子から表情が消えた。せつかく回復を見せた爽子に爽は騒動を恨んだが、恨んだところで騒動が消えることはなく、ほおっておけば、自体は悪化の一途をたどってしまう。

「マスター。行き先はどうしますか？」

改札口を入ってから、浮遊する赤い球体電話ホオボスに聞かれ、爽は足を止めず思案をめぐらせた。

「まずは上り…」

「上りならば、二分後に3番線のCKエリア行きの電車が着きます」
「爽子さん、上りの電車に乗ります。行き先は乗ってから考えましょう」

うなづく爽子を見てから、ホームにたどり着くための下りエスカレーターに乗った。

到着を告げるアナウンスが耳に入り、爽は少しだけ警戒の糸をゆるめた。

ホームに着くと電車を待つ人が目に入り、アナウンスに従うため動き始めていた。

「…この馬鹿…」

爽は、自分を罵った。

その時には、すでに遅かったが。

気づく直前まで、その物体たちは爽の視界に入り込んでいた。

もし、直前まで気づけなかった事を言い訳できるならば、応見が『怪物』や『モンスター』と単語を使ったからであり。モンスターというのは、二人の人間を例えていたと気付けなかったから。

しかし、この場に応見がいたならば、彼は反論していただろう。その二人は、爽も知っている人物たちである。と。

「爽子さんっ」

爽は離れたばかりの手をつかみ、下りエスカレーターを駆け上が

り始めた。

その直後、背後から聞き覚えのある声が響いていた。

『俺以外は敵と思い、決して近づくな』

改札口に向かう間、電話口で応見が言っていた事を公開と共に思い出した。

爽にとって、その人物たちは見慣れた者達であった。

爽や紅子同様、応見が管理する特別任務関係者であるのだから。

『でも…応見は。この二人を怪物って例えていた。

怪物。モンスター。味方ではないこと』

爽は走りながら、頭を整理して、事の危険を改めて知った。

『でも、何でエリートが…』

追いかけてくる二人は『特別任務』に選ばれたエリートたちであった。

そのエリートたちが、爽子を狙っている。

「……………」

爽は、改めて爽子の正体が気になった。

「なぜ？…でも」

『何であれ、今は爽子さんを助けるのみ』

そう答えを出した、爽は爽子の名を呼んだ。

「爽子さん、二手に分かれましょう」

このまま逃げていては、間違いなく捕まる。

そう判断した爽は走り続けながら浮遊する携帯電話を呼んだ。

小声で命令しながらも、爽は腰から伸縮自在な武器を取り出す。

「ホオボスは、爽子さんについてって。通話やメールも爽子さんが指示すれば繋いで」

未来の携帯電話はクレジット機能がある分、セキュリティレベル

ルが高く、主人が認めない限り他の人が使えないようになってい
「かしこまりました。マスター」

あらかじめ命令していれば、この携帯電話は私と変わらずに接す
る事ができた。

「爽子さんは、これを持っててください。おもいきり振り回せば、
元の大きさに戻ります」

爽は同じ姿である事を利用し、相手を戸惑わせようと考えた。

二手に分かれた時、敵は重要人物を狙う。

となれば、爽と判断できる、赤い球体携帯を持っている方は狙っ
てはこないだろうと、短い時間で決断したが、相手はエリート。単
純に引つかかってくれるかわからない。

「ホオボス、応見に、モンスター出現ってメール。」

それから、一分ごとに居場所を応見にメール送信して」

「かしこまりました、マスター」
「爽子さん、もし捕まりそうだったら遠隔操作をオフにしてくださ
い」

頭に思いつく限りの考えを口にしてから、二人は改札口までたど
りついた。

払った入場料は無駄にして、二人は駅の敷地から一步外に出た。

「……………」

二人は同じ顔を向けて、うなづいた。

そして

爽は右に、爽子は左に曲がった。

逃走の先にあったもの

爽は走りながら考えたていた。

遠隔操作する機械を捕まえたところで、操縦席とをオフにすれば、爽子安全は守られる。

「……………」

ただ、一つ心配があった。

なぜ、ロボット操縦する爽子を追う理由があるのか。

あのロボットに狙われる理由…何か『とんでもない物』が埋め込まれていない限りは、回収されても、どうって事ないけれども…。

「……………」

この考え、当たっていたら、どうしよう

口から出た独り言に、不安を感じてしまった爽だが、慌てる余裕はなかった。

「……………」

爽は、再度振り返り追っ手を確認した。

追っ手は、大男が一人…。エリート達も冷静に考え二手に分かれづらい。

「…小さい方が」

大男とは言ったが、追っ手二人は体格の良い方であり、爽の発言は片方と比べてであった。

しかも、その大きさで、同じ高校に通っているから嫌でも名前を覚えてしまう。

名橋 洵

もう一人の三森格士みもり かくしよりは穏和だが、あくまでも、爽の見た目で

判断しただけで話したこともない。

本当の事はわからず、下手すれば応見みたいな性格かもしれない

のだ…。

適当な所を見つげ身を隠すか、相手の動きを封じこめるまで戦うかの二つしか考えていなかった。

爽は人をかき分け、人の多い通路を探した。大男と違い、人ごみにまぎれようと考えたが、身を隠せるほどの人ごみは見当たらず、差を縮められないよう、走り続けるしかなかった。

見慣れない町。

こういう時、地図機能を持つ未来の携帯電話がいてくれたら、どう進めば迷わず相手から逃れることができるのだが。爽子優先である以上に渡したため、爽は運を任せ闇雲に走るしかない。

「…迷った…」

正確には、曲がった先が行き止まりになっていた。相手をまこうと狭い所に選んだばかりに…。

「……………」

苦笑するしかないと、振り返ってから爽は思った。

相手は数メートル先まで近づいていたから。

浮遊する茶色い携帯電話をお供にして。

「……………」

大男が背にする道以外は建物の壁に挟まれた行き止まり。

さて…戦うしかないか。

血の気の多い性格もあり、決断した瞬間にはもう爽は飛び出していた。

突進して、拳にした右手を相手に向ける。

爽は『話し合う』という選択は考えてなかったようだ…。

応見の話では『相手は檻から逃げだした』という、以上、何をしでかさかわからないと判断したからであり。

目の前にいる、その穏和そうな顔で笑みを作り、話し合いモードに見せかけ、攻撃する…可能性だってある。

そこまで爽が考えすぎるのは、一体の冷血ロボット（応見）が良くつかう戦術の一つらしいからだろう…。

「…」
第一撃は、空を切るだけだった。

大振りに舌打ちすることもなく、爽は第二撃を向け、第三、第四と続けた。

相手、名橋 洵はでかい凶体をしているわりにはすばしっこく、後退するだけだった。

反撃は、今のところしてこないが、爽は焦りを感じていた。

こんな大男を武器なしで倒すのは困難である。爽は戦うふりして、なんとか大男の背後にまわり、再び逃げだせないかと思案した。

「はっ」

声をあげ、拳当てを繰り返していたのを突然やめた。

爽は、体をひねりながら跳んで蹴りをかました。

回し蹴りは男の後退によって失敗し。次の蹴りも同じだった。

「……」

相手は後退するのみで、攻撃をしかけようとしなない。

『こつちを疲れさせようとしているのか』そう判断した私は、左側に寄ってから、再び回し蹴りをかました。

ただし、飛び上がるのではなく、回りながらしゃがみ、左脚をまっすぐにのばした。

簡単に言うならば『下降回し蹴り』

回転により後ろに回った脚で相手の膝の後ろを突き、体勢を崩す

ことにした。

後ろに回った以上、後退はできない。

ましてやでかい図体をしているんだから。

「……………」

でかい図体は、重いはずの体で軽々と飛び上がった。

背を後ろに曲げて一回転し、体操選手のように両足で着地した。

「……………」

こいつ…徹底して後方を守りやがっている。

『たん』と両足が地面に到着した時、爽は動かなかった。

「負けたわ」

差がはつきりとわかった以上、無駄に戦う気は爽になかった。

「……………」

苦笑を浮かべているが、諦めたわけではない。

相手の要求を聞いて…聞きながら背後を狙って逃げ出す…という案を考えていた。

やはり、狡猾なロボットの元でバイトしている影響からだろうか。

「さすがはエリートだけあるわね」

「いや、俺が強く見えるのは、防御しかしてないからだ。攻撃をしかけようとすれば、茶果木さんの反撃をまとも受けるよ」

『茶果木さん』…と爽を名字で呼ぶ大男の顔は穏やかなままで、敵意というものはなかった。

「……………」

爽は何も言わず、相手がどうするか、何を口にするのか待つことにした。

彼等がここに来た以上、爽子について何か手がかりがつかめるかもと考えたからである。

「……………」

「君は、応見の使い魔みたいな存在だから、情報は流れているはず。

先に言っておくが、檻に閉じこめられたのは、何の理由もなく、応見かやった事だ」

穏やか青年とはいえ、管理者を呼び捨てにしているのは、爽にあって少し安心できたが。それよりも、常用な問題が浮上していた。「ちよつと使い魔ってどういう事よ。私は『あれ』から仕事をもらっているだけよ。付属物みたいに言わないで」
そういうことである。

「……………」
爽の反論に、大男は穏やかな表情のまま、眉を少しだけ動かした。「てつきり、応見側の人間と思っていたが、違うようだな」
「当然でしょ」

即答に、向こうは笑みを浮かべたが、急にそれを消した。
「ならば、教えてもらおうか。堯実たかみさんの居場所を」

「た、たかみさん…って、あの陽本堯実ようもと たかみ」
その名前に、爽は全身が凍り付いていくのを感じとった。

陽本 堯実

彼女は、洵や格士ら『特別任務』に就くエリート達にとって重要な人物だった。

『特別任務』は、ある人の所に行き、地球以外の全て星人が喉から手が出るほどほしい『ある物』を手に入れなければならない。それを持っているのが陽本堯実である。

「……………」
そんな重要人物が、爽子だと、洵は言っているのだ。
「堯実さんが行方をくらました時、紅子と茶果木さんの姿が見えなくなつた。」

茶果木さんは『応見の使い魔』という噂があるから、もしかやと思
い追跡しようと思つたら」
「応見に閉じこめられた」
「そういう事だ」

「……………」
苦笑する大男こと、名橋洵の顔に隠された表情は見当たらず、爽は信じていいものか、眉間に岩を寄せた。

彼の話は納得できるが、…ただ一つ。一人の人物に引っかかってしまう。

紅子

やはり、彼女の行方がわからなくなっているらしい。

爽は思案をめぐらせた。

紅子の行方不明と、今回の仕事に何か関わっているのかわからない。
い。

でも、何か引っかかるところがあった。

「とりあえず、茶果木さんとは信じていいようだな」

爽は目の前に大男がいたことを思い出し、穏やかな声に考えをやめた。

名橋洵は大きな右手を差し出していた。

「……………」

爽は彼の顔を見つめた。

さきほどと同じく穏やかな顔。何かを隠しているものはなく、笑みを作れば将来いい『保父さん』になれそうと思えるほど、優しい顔をしていた。

この人、個人だけならば信じていいかも…と、判断した爽は、洵の手を握った。

「爽でいいよ。私も洵と呼んでいいなら」

「もちろん」

手を離れた時、ようやく洵は後ろを空けた。

「まずは格士さん達と合流しよう。バーチャル・ライフを操作しているのが本当に堯実さんならば、一緒にいるはずだ」

洵は上空で待機させていた茶色の球体電話を呼んだ。

歩き始めた洵の大きな背中を見つめ

2人の会話

「……………」
格士と爽子が向かいあっていた時、双方の携帯は沈黙を守っていた。

「堯実さんですね。あなたが操縦しているのはわかっています」

「……………」

何も言わず格士を見続ける爽子の後ろにも、爽同様に逃げ場のない行き止まりになっていたが、二人のいる道路は広く格士の隙をつければ楽々と逃げられるだろう。

しかし、爽子の足は動くことなく、その目も隙を伺うために格士を見つめてはいなかった。

「あなたが、茶果木 爽ではないのは、わかっています。茶果木爽だと思わせるために、爽の持ち物を持たせたんだろうけれども、見分ける側としてはそれ以上にわかりやすい事はないですから。

彼女も連絡とれるように携帯を渡したのは明らかですからね。持ち主は自分の番号ぐらい知っていますから公衆電話にいけばすぐに連絡がとれますし」

「……………」

「あなたが堯実さん以外の奴でもないことも。両手を腰に手を当てて、悪ガキをしかる母親の様に俺を、凶体も態度も大きな男を見られるのは一人しかいません」

格士に言われた通りの姿勢でいる事に気づき、爽子は苦笑を浮かべた。

「応見さんが、あなた達を閉じ込めたのは、目立ちすぎる体格でうるうるされないようによ」

爽子は口を開いた。

「ロボットを操縦していない時のように。」

「あいつは、でかすぎるから」

「あなたも、でしょ」

爽子のつつこみに、格士は苦笑、ではなく頬をほころばせていた。格士の耳に届く声は爽のものだが、その口調は間違いなく聞き慣れたものであった。

「やっぱり、間違いなく、堯実さんだ」

につこりと小学生のように笑う格士に堯実も微笑み返していたが、すぐに表情を消した。

それは格士も同じであった。

「堯実さん、一体、何があったんですか。教えてください」

「……」

堯実は、格士から目を反らし、灰色の地面を見つめるだけであった。

「黙るなんて、あなたらしくもない。紅子の行方不明なのと、何か関係があるのですか？」

「……」

「堯実さん」

堯実は、首を振るだけであった。

「格士。洵を連れて帰ってちょうだい」

「嫌です。今、ここで、理由を聞かない限り、絶対に帰りません」

「それは、心の整理がついたら話すわ」

「……」

格士の目は、僅かに変わってゆくロボットの表情を読み取った。暗く、悲しく、孤独なものを。

それは前、爽も読み取ったものだが、格士は首を振った。

「堯実さん、今、あなたは、どういう状態なんですか、それだけでも、教えてください」

「五体満足よ。」

バーチャルライフというロボット操縦しているけれども、生命の危険はないわ。

もちろん、あなた達が狙っているものも、誰の手に触れることな

く

「そんな物はどうでもいいことです」

格士は、きつぱりと否定した。

「確かに、俺達と堯実さんとは『その物体』で繋がっている。

その物体は、誰の手に入るところにあつて、今まで、誰一人として、手に入れようとすらしらない。

それは堯実さん、あなたとの関係が崩れるからです。

あなたと離れ離れになること。特別任務に就いた者にとって、その物体を手放す事は堯実さんが悲しむのを知っています。だから誰も手に入れ様とはしないんです。

あなたの温かさはずっと触れていた、あなたのために何かしたいと皆、思っています。

皆、あなたに慕っているんです。だから、俺と洵がここに来たのは、堯実さん、あなたが心配なだけです」

特別任務に就く者たちは、皆、陽本堯実を家族、母親のように慕っていた。

それは彼女の接し方が、エリートとして鍛え上げられた者たちにとって触れたことのない、親しみがあり、飢えた愛情に何よりも応えていた。

「……………」

格士の声は堯実の耳に届いていたが、格士を見上げることはなかった。

「…。堯実さん、あなたが無事だと聞いてほっとしました。あなたの言いつけ通り、洵を連れて帰ります。

でも、もう一つだけ、教えてください。紅子は、紅子の行方をあなたは知っていますね」

「……………」

堯実の口は開くことはなかったが、視線は格士から離れていた。

「まさか…」

「格士…。何も言えない。何も…」

首を振る堯実の今にも泣きそうな表情に、それ以上問い詰めることはできず、格士は堯実から背を向けた。

「洵たちと合流するまで、お供します。あなた一人にはできません」
格士の球体電話が洵の着信を告げたのは、この時だった。

離れ離れになった二組の待ち合わせ場所は、駅の南口となった。

「爽。君は羨ましいよ」

駅に向かう途中、爽の隣を歩く、でかい凶体から声が届いた。

「何が？」

「堯実さんと『負い目』を持つことなく、一緒にいられることだよ」
爽は、慣れない角度に合わせて洵を見上げると、穏やかな顔がわずかに曇っていた。

「特別任務に選ばれた俺達は、堯実さんから『ある物』を取らなければならぬ。

その物は、堯実さんの婚約者が作り上げた、異なる星の者たちにとって喉から手が出るものだが、堯実さんにとって、失踪した婚約者の唯一の手がかりとなる」

「それは、聞いたことがある」

「堯実さんに慕う者たちにとって、それを奪うことはできない。だが、各星の代表に選ばれた以上、堯実さんと接し、いつかは奪わなければならない」

洵の口は閉じたが、爽は、その後に隠された言葉を知り、頭の中で続けた。

『奪えば裏切りを表し、堯実さんを悲しませることになる。』

だから、誰一人として成功した者はいない』

「爽は、その鎖がない。堯実さんと純粹に接することができる。俺

らにとつて羨ましいよ」

「まあね。私は紅子の補欠だし、万が一、紅子に何かあつても、よっぽどのがない限り、私に周ってくることはないから。」

もし、紅子に何かあつたら、特別任務権は私ではなく、別の星に渡ってしまうから」

「羨ましいよ。本当に」

補欠にとつてその言葉は皮肉なものであつたが、今の爽は素直に喜ぶことができた。

あと3歩先にある角を曲がると、爽と同じ姿をしたロボットを操る陽本堯実と、三森格士がいる。

彼女は、重要人物である陽本堯実であるが。爽の口は『爽子さん』と呼び、重要人物という言葉に関係なく接する事に決めていた。

爽にとつて特別任務など関係のない話なのだから。

「それにしても…一目でわかるね」

三森格士のでかい姿は一目が付き、向こうも洵の図体に気づき、手を振っていた。

そこで4人は合流し、再び二組に分かれるはずだった。

『ぱあん』と音をたてた銃声により、それは一変した。

「な、何なの？」

音を立てたそれは、爽の数十センチ左のコンクリートにめり込んでいた。

襲撃者を捜そうと見上げようとしたとき、黒い何かが目の前に現れた。

「探すよりも、逃げろ」

それは洵の太い腕だった。洵の大きな手が肩をつかみ方向転換させようと軽く後ろに押した。

返答よりも早く、爽はあと数メートル先にある爽子達のいる南口に向かって走り始めた。

再びの逃走

「まさかとは思っけれども。二人を追ってきた応見の仕業じゃないでしょうね」

南口に到着した爽は気づいた事を口にして、爽と洵の到着を確認してから三森格士が答えた。

「どういう理由があつてかはわからないが、俺らを閉じ込めた奴だからな。応見の仕業かもしれないな」

と肯定するものの、格士は首を横に振って否定意見を述べた。

「だが、ここに到着するまで時間がありすぎる。」

脱走した時に待ち構えていた応身をノックアウトさせたのは前の晩になる。そこから修復時間を足したら、とうてい無理だ」

「つて…何、関係者をやつつけているのよ」

「2人とも、いいから走ってくれ」

洵に怒られ、爽は走ることに専念しようとしたが視線を爽子に向けた。

同じ速度で就いてくる爽子は、ロボットを操縦するだけなので疲れる事はないが、精神的な負担が気がかりでならなかった。

それぞれの浮遊する携帯電話で入場料を支払い（爽子は爽が負担）、改札口に入つて真ん中にあるホームに向う。

エスカレーターを駆け下りながら、爽は後方を走る三森格士に電車の時間を聞いたが、彼は首を横に振った。

「電車には乗らん。向こうは駅に入れば必ず電車に乗ると思つはずだ。このまま北口に出る」

格士の案に、爽は目から鱗が取れたが、それと同時に不安を覚えた。

「それで、格士さん。どう分かりますか、四人一緒だとすぐにバレますよ」

「そうだな、お前は目立つから」

自分を柵に上げる2メートル近い男、格士は『1：3』か『1：1：2』と答えた。

「おれは絶対『1』として動く。敵を見つけ次第、仕留めておかないと気がすまない」

格闘の『格』に騎士の『士』を持つ格士は、血の気の多く、彼の性格がある程度知る爽を含め、止める者はいなかった。

「後は洵と爽で決めろ」

それだけ言うと格士は、足を止めた。

振り返って元来た道を戻るため。

「気をつけてくださいよ。それと捕まらないように」

振りかけた洵の『捕まらないように』は敵ではなく、『警察沙汰にならないように』という事を指していた。

「さて、我々は…」

前方にある階段に向かいなが、先のことを考えようとした時、後方から大きな音が近づいてきた。

それは大きな鉄のかたまり、電車だった。

この電車は爽達が階段に走り着くまでには発車するだろう…そう考えた時、洵と目が合った。

『頼んだ』

そう言っているように思えた爽は、うなづくと爽子の手首をつかみ、開こうとする扉に向きを変え、中に飛び込んだ。

電車の扉が閉まる頃には、洵は階段にたどり着いていた。

階段に向かう洵の後姿は、すぐに見えなくなり、窓の外はホームから景色に変わっていった。

「大丈夫ですか？」

車内に空席はなく、爽達は扉側に立ち、とりあえず車内に追手はいないか確認した。

偶然来た電車に飛び乗れたせいも、危険は潜んでないようだ。

「マスター。マスターが命令した。1分後とに居場所を応見さんにメール送信する」命令は継続しますか？」

優先席ではない事を確認した上でマナーモードに自動切換えした浮遊する球体の携帯電話は、頭上にふわりと移動して爽に尋ねた。

機械は、命令を解除するまで実行するので、洵たちに追われた時から、今の今までメール送信を続けていたようだ。

「とりあえず、解除して。下りた時に一回だけ居場所をメール送信してね」

「かしこまりました」

赤い球体型携帯電話は電車時の待機場所、登録された主人、爽の頭上に移動した。

ちなみに電車内も人間の周りには必ず浮遊する携帯電話があつて、見慣れない人にはさぞ異様な光景に見えるが、浮遊携帯電話が周流となっている『この時代』では当たり前前の光景であつた。

「……………」

一息ついたところで、爽は爽子に視線を移した。

「あの、爽子さん……」

「……………」

爽の言葉に、爽子は弱々しく笑った。

『まだ、爽子と呼んでくれるのね』

格士たちが現れ、さらに襲撃の危険にさらされ精神状態が悪くなったのだろう。彼女は無言だったが、向けた目はそう語っているように思えた。

「爽子さん。私がいいます。信じてください」

応見と合流できるまで、どうなるかわからない今、爽の口はそれだけしか言えなかった。

「……。ありがとう」

僅かに発した声は小さ過ぎてほとんど聞ききとれなかったが、僅

かに見せた笑みで十分に伝わった。

「……」

爽子は、爽の肩に同じ顔を置いた。

このロボットを動かす操縦席で、彼女がどんな状態なのか察しがつく。

爽は何も言わず、電車のアナウンスに耳を傾けることにした。

飛びこんだ電車は、あと3つで終点になる事を知った。

爽子は顔を肩から離し落ち着きを取り戻しているの、どこでも降りられる。

『さて、どうしよう』と、爽はあごに手を当てた。

「まずは、応見さんと連絡を取るべきではないでしょうか」

携帯電話に相談すると機械は、重要な意見を述べた。

「そうね、そうだよね。ばたばたしていたから、どうしてもそれに気づかなかったのかな」

というわけで、次の駅で降りるとにした。

電車内で携帯電話を浮遊させるのは許されているが、さすが未来でも通話は禁止されている。

ボタンのない球体型携帯にメールするにも完全音声入力なので、通話と同じに見られてしまう。

『未来』なのに携帯機能の不便さを実感しつつ、爽は爽子の手をつなぎ、反対側を開く扉に向かった。

自動減速はなめらかで、ゆるやかに、そして正確に止まる。

そのせいか、直前までそれに気づくことはなかった。

「え……」

見覚えのある茶色い髪が爽の目に入った。

電車が完全に止まった時、その者はだいぶ左側にいつてしまったが、頭上たかく結わえた少女は間違いない。

「紅子……」

同士

行方不明になっていた彼女の姿があった。

『なぜ？どうして？』という疑問と同時に、開かれた扉から彼女の所に向かつて良いものなのか、警戒が生まれ不安になっていった。でも、強い力が爽を電車内から出した。

それは爽の精神的なものではなく、背後にいる爽子でもなかった。前方にいた赤茶色の男…。

爽の記憶にはないが、爽が住んでいた赤い星の者であるのは読み取れた。

読み取った時にはもう、爽達は電車から引きずり出される状態にあった。

『疑問』が頭に浮かんだ爽の頭から、それが瞬時に消えて『危険』と『殺気』何よりも”守らなければならない”その単語が頭にひらめいた。

「爽子さんっ」

電車移動中に返してもらった武器を、向かってくる方向に振り上げた。

爽が所持しているのは伸縮自在の武器、棒。

それは強い力を感じると元の大きさに戻る。武器を戻している暇がない状態では、攻撃を受けとめるための動作で元に戻すしかない。1メートルほどの、鉄よりも軽く丈夫な武器が現れたのと同時に、強い衝撃が爽の腕に伝わってきた。

今の騒動を眼にした人からどよめきと悲鳴が上がったが、当事者たちにとっては関係のないことだった。

とはいえ双方とも駅員や警察がくるまえに終えたい。

ましてや爽から見れば、捕まらず、爽子さんを守らなければならぬ。

「…電車」

電車に戻れば、彼女だけでも。それに気づいた爽は後ろを振り返った。

振り返った時には、もう扉は閉まるうとしていた。しかも…
痛みが肩に走っていた。

よそ見をした一瞬をつかれたらしい。

顔を前に戻した時、爽の目は、赤茶色の髪をした男がさらに一人、近づいていた。しかも、その男の投げたナイフが痛みの原因らしい。

「……………」

爽は、混乱を覚えた。

赤茶色の髪をした者たちは、爽と同じ星出身で、味方でもある。

その者たちが、爽に刃を向けてきた。

さらに消息をたっていた紅子の存在。

「……………」

その言葉が処理できず、爽の頭の中でうごめいていた。

さらに肩の痛みは増し、周りの人たちは一斉に視線を向けていた。

そして、いつくるかわからない駅員や警察…。

「……………」

爽は解けない謎の渦に飲み込まれそうになったが、爽子の存在が爽に動かす力を与えた。

考える事は、後でもできる。今やらなければならない事は、ただ一つ。

戦い、爽子さんを守ることが先決だと。

爽は、ありったけの声を上げた。

肩の痛みと頭の中でうごめく疑問の言葉を消し飛ばそうとするために。

爽は、相手の腹部を思いっきり突いた。

特別任務の補欠だが、応見に認められる能力値はある。

棒だから致命傷を与えることはできないが、爽にはバレーボールを破損するほど（体育の時間に実践）の腕力がある。

突かれた相手が数メートル先までふつとぶ力を。

守らなければならぬと答えを出した爽は、冷静に判断と素早い行動を始める。

近づいてきた男の手首を棒を叩いて、手にしていたナイフを落とさせて、膝の後ろを蹴った。

体勢を崩し始めた男の腹部に懇親の力で棒を突く。

その男も棒をつかって頼り投げようとしたが、爽は、爽子が左側に移動した事に気づき、慌てて振り向いた。

「爽子さ……」

発した自分の声が銃声によって消された。

崩れ、落ちて行く爽子を目の当たりにして、爽は二つのことを知った。

爽子が爽をかばってくれた事。

それと銃を放ったのが、紅子だった事。

「……………」

それを理解できるまで、同じ姿をしたロボットが床に沈む時間を必要とした。

新たな野次馬の悲鳴がどこかで届いた。

「死ぬことはない、逃げてっ」

呆然とする爽に爽子は、声を上げた。

彼女は操縦席にいる。電源を切るか、オフラインにすれば命に別状はない。

今、狙われているのは自分自身。

「……………」

爽子さんに言葉をかける暇なく、爽は走り出した。

再び銃声が聞こえたが、運良く当たることなく、爽は改札口に向かって走り出した。

紅子が爽子さんに銃を向け、同じ星の者たちが私に攻撃してきた。

目の前で起きた出来事を爽の頭は記憶できたが、理解できないでいた。

考えをまとめたくても、同星人たちが追いかけてくる今、爽は、ただ走るしかなかった。

「はあ…はあ…」

爽は見たこともない町の中を、生命維持のために走り回った。

走りながら爽は赤い球体電話の電源を切って、それを上着のポケットに沈めた。

未来の携帯電話にも、自分のいる場所を把握できる機能がある。

特別任務、補欠とはいえ爽は星側から見れば重要な存在であり、いつでも居場所を把握できるように携帯から情報を得ている。

爽と同じ星人たちが、この駅にいたのはその『探知機能』が原因だった。

本来なら同星人から保護されるための機能だったが、襲撃するため悪用されてしまっていた。

「はあ…まったく、もう」

「はあ…」

走りまわり、ため息をついて落ち着いた時、爽はどこかの公園のすみにいた。

公園は、はしゃぐ子供たちの姿はなく、しいんとしている。

「っ…」

肩がずきんと痛んだ。投げナイフはかすった程度なので、傷は浅いが、血が爽の白いシャツを染めていた。

抜き取ったナイフに毒らしきものを塗った形跡はないから、忘れた頃にくる痛みに耐えれば何の問題もないようだ。

紅子

時が流れた。

携帯から情報を得られない爽にとって、それがどれくらいなのはわからなかった。

「応見は逃走を始めた駅についたのかな。連絡しなければならいけれども、携帯電話は使えないし…」

携帯電話を財布代わりに使っていたので、持ち合わせもなく、公衆電話で連絡するどころか、電車で移動することも不可能であった。「不便なものね…。」

とはいえ、このままでいるわけにはいかないわね」

危険を冒して、一度だけ応見と連絡をとると決めた爽はポケットから携帯電話を取り出した。

「ホオボス」

「音声認知…OK。電源が入りました。マスター、状況はどうですか？」

ふわりと浮き上がるうとした携帯電話を爽は両手で包んだ。

「残念ながら、かなり悪いわね。」

フォボス、長い間電源さえ入れられないから、今いる場所を応見にメール送信して。そして、すぐに電源を切って」

「かしこまりました」

命令に従った、携帯をポケットに入れ爽は、公園の出口に向かった。

「今の場所は襲撃者に知られているだろうから。できるだけ遠くへ…」

走り出しながら、爽は襲撃者の疑問が思い浮かんだが、考える必要はなかった。

「……………」

彼女に聞けばすむから。

今ので情報を手に入れたのか、それとも偶然見つけたのかはわからないけれども。

「こつ…こつ？」

前方の広場を背にする者に爽に疑問を持った。

赤い星人特有の、赤に近い茶髪を頭上高くゆわえた少女から離れた大人の女性。

紅子だと思っていた顔も微妙に違う。

「私は紅子の従姉妹にあたる」

似ている事を教えた女性は、さっきの襲撃者である証明をするかのように銃口をまっすぐ向けた。

「ねえ、ちよつとまって。どうして同士を打つの？」

教えてよ。何で狙われなければならないの？紅子は？紅子の行方がわからないのと、何か関係があるの？」

「紅子は死んだわ。」

陽本堯実の襲撃に失敗してね」

帰ってきた言葉に、爽の頭はフリーズした。

紅子にとつて爽子を操縦する陽本堯実は特別任務に重要な存在。

なのに襲撃し、そして…。

「……………」

何も言えない爽のために、紅子の従姉妹は説明を始めてくれた。

「紅子も、あの女、陽本堯実に魅了されて、星の使命を達成できなくなりそうになった。」

だから、私達ガルゼ派が渴をいれてやらなければならなかったわ」

魅了…洵が言っていた。特別任務に就くエリート達は彼女に慕っている。

でも、知らない者、狙う物体がほしいだけの立場から見れば、それは魅了になっってしまうんだろう。

「紅子は自分の宿命に気づき、我々が用意した仲間と共に、向かっ

てくれた。

だが、失敗に終わった。

どこかで情報が漏れたらしく、legge-his《レッジ》（応見の正式名称）の率いる機械守護隊によってことごとく散っていったのよ」

「……。紅子は……まさか、応見に？」

「いいえ。自らの意思で散っていった。

どっちにしろ、中立派の者に見られれば紅子の復帰は絶望的だった。もちろん、特別任務権も別の星に移る。いや、下手すれば我々の星に再び特別任務の権利がくるのかすら、問題になってきた」

どんだん明らかになっていく情報を爽はただ、耳にいれる事しかできなかった。

人の命の重さなどなく、淡々と説明する者の声に感情というものはなかった。

真実を見せた説明に、爽は呆然とし、シヨックが全身を包み込んでいく。

「……。それで……どうして、私を狙うんですか？」

開ききつた目で、表情のないロボットの様に爽は自分の事を尋ねた。

今は、目の前の銃口により自分の事でいっぱいだった。

「先の見えなくなった我々にとって、残された道は一つ。陽本堯実を消すことと、星々が狙う『その物体』を破壊すること。

『その物体』を奪って持ちかえれば足がつく。他の星に奪われるならば、破壊するのみ。もちろん、陽本堯実も同じ事。彼女を抹殺しなければ、紅子が報われない。

もちろん、陽本堯実に関わった者も、同朋者であろうとも。今回の襲撃に関係したものは関係なく」

「……………」

淡々と出てくる言葉に人権とうものはなかった。ただ、自分のプライドを満足させるためであり。自分と関係のない者は、彼女達に

とつて『物』同然なのだ。

『紅子が報われない』と言ったものの、本当に紅子のためではないのは明らかだった。

その襲撃が失敗に終わった腹いせに。ただ、それだけでしかないのだ。

「……………」

爽は、それを知ることができた。

でも、頭は整理できず。

目の前の危険に回避することも。

「……………」

いや、回避しなければならぬ。

今は、回避しなければ、生きていけない。

今聞いたことに対する感情、情報整理をするためにも。

どうすれば…

「聞きたいことは、それでいいかしら？」

時は近づいたとばかり、安全装置を外す警告音が響いた。

「……………」

相手に一瞬でも隙をつくれれば、致命傷を外すことができるだろう。

だが、爽の手にあるのは一本の棒、いくら丈夫であつても、弾丸をバットのようにはじく能力なんて持ち合わせていない。

どうする…どうする。

だが、どうすることもできないまま、銃声が響いた。

何もできないまま、爽は体を支える力を失い、両膝について倒れていく。

時間がゆっくりになったような気がした。

倒れて行く間、向こうの女もゆっくりと倒れて行くのが見えた。

誰だ？誰か、助けてくれたのか？

でも、地面に到着した爽が、それを目にすることはできなかった。

目覚めた後

爽の目に白い世界が現れた。

「生きている……」

爽は目が覚めた時、ここが現実であることに気づいた。

視界いっぱいのは白色は、シーツに布団に枕カバーに壁。どれも純白ではなく、少し黒ずんいるが、ここが現実世界である事を実感することができた。

「本当にしぶといよ、お前は」

白い世界にたたずむ大きな影がゆらりとゆれて、爽は苦笑する応見を認識した。

応見の手には、電源を切りっぱなしにしている赤い球体電話を手にかけていた。

「……応見が地獄の死者に転職していなければ、ここは、現実っていう事ね」

「お前が憎まれ口をたたけるのは、これのお陰だよ」

応見はベッドサイドを指差して壊れた武器に気づかせた。

鉄よりも丈夫な棒には亀裂が入っていて、先端は粉々になってい……る。

「爽のことだ。打たれた瞬間、棒を胸の前にもっていったんだろう」
「応見は呆れた顔をしながら、棒を立てにして胸の前に持っていく
仕草をした。」

「……うそ。私、そんなすごい事していたの？」

「していなければ生きてはいない。まったく、驚いた」

「応見の言葉に納得するしかないが、この棒、長さは一メートルあるが、直径は三センチもない。」

「……………」

爽は棒を見つめ、無意識に行動した自分に驚く事しかできなかった。

公園で爽は、銃の衝撃を受けた後、両膝をついて倒れた。未来製の武器とはいえ、致命傷を放つ武器である。まともにくらえば後方に飛ばされる。

なのに、爽は両膝を突いて倒れたのだ。

「……………」

このものすごい無意識力が、期末テストにも使えれば……」

「……。生命とテストはどうレベルなのか……」

応見は呆れ顔を浮かべたが、爽が呆然から戻ってきた事を知った。

「……。あ」

爽は、忘れていた情報を思い出して、応見を見上げた。

「聞きたいことはわかっているが、後にしてくれ。俺は、忙しい」
開きかけた口から出る言葉をすべて読み取った応見は、くるりと背を向けた。

「ちょっと、危険にさらされた哀れな女子高生にそれはないんじゃないの。」

「自分が哀れと思うのならば、もっと大人しくしてろ。」

爽。この部屋には鍵をかけある。自ら空けようとする馬鹿げた事をするな。自分の置かれている立場はわかっているだろう。

それから携帯は預かっておく。間抜けやって電源が入ったらおしまいだからな」

爽の携帯には、登録された主人の居場所を発信する機能があるので、電源を入れた途端、爽の居場所が同朋者たちにみつかったしまう。

「もちろん、脱走するなど思うなよ。この前の一件で監視体勢が強化されたのを教えてやるう」

洵たちは無事に合流し、牢屋に入れられてしまったらしい……。

「応見。あの人は？」

背を向けて歩き出した応見の動きが止まることも、振りかえることはなかったが『無事だ』と言葉を返した。

扉の閉まる音がして、鍵のかかる音が部屋に響き渡った。

あの人が無事ならば、それでいい。

ほっとした爽は、もう一眠りすることにした。

鍵がかかる音を確認した応見は、ドアノブの上にある黒い板から手を離した。

黒い板は緑色の線で右手をかたどっており、5本の指と手相全てが当てはまらない限り開くことはない、嚴重なものになっていた。

「とはいえ、これ見たら怒るな」

応見が扉に書かれていたプラスチック製のネームプレートには

『第7保管庫・危険物につき関係者以外立ち入りを禁ずる』

と、書かれていた。

だから嚴重な鍵にしても誰も疑うことはないだろうが。

応見たちがいる建物は『異星連合』という異なる星から地球に来た者は必ず訪れなければならない。管理施設で、他国に行くように異星人が必要なパスポートやビザを紛失した時の処理もしている。

とはいえ『異星連合』が取り締まる一番のものは星々がほしがる特別な物の争奪ゲームの監視であった。

応見は、その争奪ゲームに参加する資格のある者たちの、高校生だけを管理している。

争奪ゲームに参加しない存在である応見は『中立派』としての存在であった。どの星に加担することも差別することもなく、忠実に冷血に立つ。

紅子の襲撃を阻止するのも、同じ星の爽を保護するのも。彼にとっては仕事の一つでしかない。

「……………」
しかし、鉄とプログラムで作られたロボットとはいえ、人間に近く作られている以上、表情を崩す。

されども、彼はロボットだった。

応見は崩した表情を一瞬で戻し、隣の部屋で足を止めた。

そこには『第6保管庫』とあるが、こちらは『貴重品につき』と書かれている。

応見は辺りを伺い、人がいない事を確かめてから、ノックした。許可する声を耳にしてから、隣同様ドアノブ上にある黒い板に手を当て鍵を解除する。

扉を閉め、さらに内側から鍵をかけてから、応見は中を進んだ。

「爽が、目を覚ましましたよ」

隣の白い部屋と違い、こちらはパステル色調の柔らかい空間になっていた。

新緑色の淡いカーペットを踏みしめながら、応見は奥にいる者に声をかけた。

奥に配置されたベッドの周りには、水色のカーテンに囲まれ、その者のシルエツトだけが目にはいる。

「…。良かった。本当に怪我はないんですね」

「ええ。呆れてしまうほど元気ですよ」

それから、応見は右側にある白く大きな物体をちらりと見つめた。

150センチ近い卵型の物体。それがロボットを遠隔操作できる『バーチャル・ライフ』の操縦席であった。

「残念ながら、あなたが操縦していたロボットを回収することができませんでした。」

襲撃者たちが回収していったでしょうが、ここを嗅ぎつけることはありませんので、「ご安心を」

「…。そう。」

もう2度と、戻れないのね」

「ええ。どんな権力者とはいえ、時を逆にすることはできません」

「……」

応見の返答に、何も言わなかったが、シルエットはうなづいていった。

「応見さん。私、決めました」

「では、いいんですね」

「ええ。時は、戻らないのですから。進むしかありません。

それが闇であつても」

最後の言葉に、応見はうなづいた。

屈辱

爽が目を覚ましたのと同じ頃。脱走した2人の大男達も同じ建物の中、牢屋戻りとなった。

再犯を恐れ別の牢屋部屋に変わったのだが、そこには上質なソファがあった。広々とした空間に快適な空調設備が整い、食料いっぱい冷蔵庫やテレビ、机の上には『現代』に存在する従来型と、先の未来で発明されたヘルメット型画面のパソコンが備えられ、ネット環境も万全に整えられている。

「いやだー。俺は、こんな部屋なんて冗談じゃねえ」

しかし、不満を唱える男がいた。

「贅沢すぎるぞ格士。これ以上に何を望むものがあるんだ」

呆れて言う応見を、格士は指さした。

「お前だ。何で24時間一緒の部屋にいなければならないんだっ」
格士の言葉通り、二人が再度脱走しないよう、応見の監視がつくようになった。

「諦めましようよ、格士さん」

格士は、ソファでくつろぐ共犯者をにらんだ。

「洵。お前、男として何とも思わないのか？閉じこめられて、自由のない生活を送らないとならないんだぞ。

男だったらなあ、野心を持って！

鎖を引きちぎって、冒険の旅に出るんだ！」

「だんだんと、話の軸がずれているな、格士よ。

第一、その鎖に繋がれるような事をしなければ、こんな事にはならなかったんだからな」

「…」

応見に軽くあしらわれた格士は、腹いせに洵の頭を殴った…。

「痛い。八つ当たりしないでください」

「うるさい。元々と言えば、お前が悪い」

「俺が何をしたって言うんですか。」

今回の脱走案も、牢屋の扉を壊したのも。待ちかまえていた応見さんと対戦したのも、みんな格士さんですよ。」

「うるさいっ。洵が参戦して応見に体当たりなんかしなければ、脱出は失敗に終わって。こんな部屋にブチ込まれる事はなかったんだ。自分の事を棚にあげての、八つ当たりである…。」

「そういえば、その直後『日頃の恨み』とか言ってさらなる攻撃を加えたんだっけなあ。」

大きくはない応見の声が、部屋中に響いた。

「まあ、俺はロボットだから、すぐに直るから気にしてはいない。安心しろ。」

『気にしていないなら、わざわざ口にすることはないのに』と思う洵に対し、格士は同じ事を声に出した。

「気にしてはいないが、俺は『男』だ。」

と、応見は答え、洵はその言葉の中に含まれている意味を読みとったのであった。

『男のプライドが許さない。売られた喧嘩は倍にして返してやる』という事が…。

悪寒が走る洵であった。

「……………」

一方、応見は二人の様子を伺っていた。

『どうやら知られていないようだな。爽の一件に、紅子の従兄弟たちによる襲撃については』

もし、聞いていれば、こんな穏やか(?)ですまされることはないだろう。

応見の行動を避難することはできないが、張りつめた空気が漂うのは確かなこと。

「格士様。お電話です。」

格士の浮遊する携帯電話が着信を告げた。

爽と違い大男たちには携帯の使用が認められている。

応見は窓側に向かった格士を観察したが、運悪くその情報が入ったようではない。

しかし、電話の相手は別の意味で応見の興味をひいていた。

「おー。カナじゃないか。久しぶりだな」

格士の黒い球体電話内に、映し出された映像は10才くらいの少女だった。

少女の名は静海カナ。

カナは小学生であるが、格士や洵同様『特別任務』に選ばれたエリートである。

同胞者にとってカナは、妹のような存在であり、とりわけ格士にとっては『妹』を通り越して娘か、目に入れても痛くない孫のようなかわいがっている。

仲間達から『カナに好きな人ができたら、実の親よりも反対するだろう…』と、ささやかれているほどに…。

『まあ、幼女好きじゃない限り、問題はない』

応見は特別任務関係者の高校生を管理しているので、小学生のカナをデーターとして知っているが、面識はない。

「…うん。連合の建物にいるんだ。…うん…」

格士は通話しつつ、前方にある窓を観察した。

『牢屋だけあって窓に鉄格子があるが…俺の体当たりなら、窓ガラスごと一気に壊せるな』

と、判断した上で格士はカナの遊ぶ誘いを堂々と承諾した。

「大丈夫だ、カナ。今からすぐに行くから、な」

応見と洵がその言葉を聞いた時には、もう格士は窓に体当たりをするところであった。

どすん。と鈍い音がしたのは、それから一瞬後。

鉄格子が折れることも、窓ガラスにヒビすら入ることなく…。

窓には格士がめりこんでいた…。

「そうそう。言い忘れていたが、ここは地下で窓はない。窓に見え

るのは外の映像を移している窓型スクリーンだから。窓から逃げだそうと、考えないように」

にこやかに、淡々と言う応見であった。

「おう…み、てめえ…」

せめても幸いといえ、通話を切っていたからカナに目撃されずにすんだことだろう。

「冗談じゃねえ。こんな部屋、一秒たりともいらんない」

それから数時間後、格士はおさまることはなかった。…いや、よく数時間もここにいられた事がすごいと思うが…。

「……………」

従来型パソコンに向かいネット検索…のフリをしている洵はホームページの掲示板画面で、隣のイスにどすんと座った格士に言葉を打った。

もちろん、出入口付近に一人用ソファを運び、くつろいでいる応見に聞かれないため。

『無茶、言わないでください』

洵が最初に打ち込んでから、正論を指でとなえる。

『ここは窓のない地下室で、唯一の出入口前で見張っているんです』
『よ』

洵の文章を見て『ふん』と声をあげ、キーボードを叩いた。

『応見だって本当に24時間、見張ってられない。その時を狙えばいいんだ』

『応見はロボットです。食べなくても、寝なくても動いてられます』
『ぶっ。甘いなあ。』

応見が管理職だということを忘れたのか？』

洵は格士の顔を見た。

『奴は連日、会議や裏工作をしなければならんだ』

『裏工作は…わかりませんが、関係者との話し合いはありますね』

『平日は6時から、始まる会議がある』

「あれ？」

洵は今が同じ日の同じ時間を10分ほど過ぎていることに気づき、親切心から立ち上がり、応見に教えようとしたが、それよりも早く格士が立ち上がり、応見のいるソファ―後ろで止まった。

そして赤子の手をひねるように応見の後ろ襟をつかみ、持ち上げた。

『脱走疑惑、発生。ただちに連絡します。だつそう…』

応見であるはずの体から感情のない声が聞こえた。

「応見が性能の低いロボットになっている…」

「代わり身だ。さつき席をたった時、こいつと入れ替わって、会議に向かったんだろう」

格士は、持ち上げたロボットを洵の前にさしだした。

洵の目には冷血ロボットと変わらないが、よくよく見てみると表情というものがなく、同じ言葉を繰り返す口は腹話術の人形みたいに開閉するだけであった。

「おおかた、応見が損傷した時に使う予備をくつつけただけだろう。

ふん、洵は簡単に騙せても、俺には通用しないんだよ」

格士はロボットをほおりなげ、ドアノブをつかんだ。

「鍵はかかっている、俺にはないのと同じことだ」

にやつと笑みを向けた格士は、その言葉の理由を体当たりて表した。

扉を壊せば鍵なんて意味がないことを…。

再び鈍い音が二度三度響いた。

その『鈍い音』は、前と違い壁ではなく、扉が木製の音であった。その音は格士の人間離れした能力によってきしみ、解放の鐘を鳴らした。

洵の体当たりにより、部屋から扉が消えたのである。

「はっ。俺が本気になればドアぐらい開けられるんだ。洵、行くぞ」

薄暗い通路に出た格士は、階段があると勘で思いこんだ左に向きを変え、一気に走した。

突き当たりの角を曲がろうとした時、突進する影があった。

『ふん。ねちっこい応見の事だ。ロボットを配置していることぐらい、お見通しよ』

突進してきた物体を難なく交わした格士は、戦闘モードに入り、さっそくストリートパンチを叩きこもうとしたが格士は動く力を失った。

無防備になった格士の顎に跳び蹴りが当たり、格士は走ってきたばかりの通路に飛ばされた。

「格士さ…カナ…」

「格士お兄ちゃんに洵お兄ちゃんまで…何やってるの」
突き当たりで現れた影、カナは両手を腰に当て睨んでいた。

格士の動きがとれなくなったのは、もちろん『目にいてれもいたくないカナ』と判断したからである。

「か、カナ。何でお前がここにいるんだ？」

「応見さんから聞いたの。二人とも悪いことをしたから、閉じ込められているんだけど。さらに脱走しようとしているんだって」

「俺がいくら言っても止めようとしなから、カナちゃんに頼んだんだ」

穏やかな声と共に、爽やかな顔をした冷血ロボットが姿を表した。
「応見…会議はどうした？」

「会議？ああ、あれは毎週月曜日と隔週金曜日にある。毎日あるわけじゃない、残念だったな」

「ぐうっ…」

「それで、二人とも。何、悪いことをしたの？」

「そ、それは」

洵は返答に窮した。

事件の裏側を知らない者たちは、ただ陽本堯実は体調を崩しているだけ知らされているだけで、カナもそれを信じている。

まさか『堯実さんが事件に巻き込まれたから、様子を見に言った』
と言えず。

「食い逃げだよなあ、洵、格士」

応見の助け舟に、うなづくしかなかった。

もちろん、それを知った上での『助け船』である。

『この人は、サディストだ。人間以上の…』

怒り出すカナの声を聞きながら、心の奥に刻む洵であった。

「いい、二人とも。こんなに優しく、格好いい、応見さんを困
らせちゃ、だめだからね」

応見の性格を知らない純粋なカナの言葉は格士にとどめを刺し、
それ以降、格士が脱走することはなかったという。

回想

紅子は、幸せだったんだろうか…。

ロボットであるが、応見は人と変わらずに物事を考え、人についても考え、回想する事もできた。

全ての始まりは、一通のメールからだった。

不穏な動きがある情報を聞き、動いていた俺に『紅子が堯実を呼び出した』という情報が入った。

『特別任務関係者』として登録された高校生を管理するのが俺の仕事だが、連合側から要請があれば動く。

できればデマであってほしいと願っていたが、現実には冷たく嘲笑し、陽本堯実の前に現れた紅子と襲撃者たちを俺に見せつけた。

だから、それ以上に冷酷な処理するしかなかった。

配置していたロボットたちを計画通り襲撃者たちを取り囲み、紅子の前に姿を現した。

「化けの皮を剥がしたか、紅子」

計画が未然にばれていた心理状態もあつてか、襲撃者達は簡単に倒れて行った。

だが、紅子は冷静なままだった。

紅子は陽本堯実に襲いかかるうとしたが、それを阻止した俺に斬りかかる。

選ばれたエリートだけあつて、隙はなく油断したらすぐに致命傷につながる。

学校内であいさつを交わし、時には会話した間柄など微塵もない。俺が人間じゃないから、レーザー銃で手首を狙い、武器を落とさせる事に成功できたのだろう。

だが、紅子は選ばれたエリートだった。

陽本堯実の無事を確認しようとした瞬間を狙い、地面に落ちたばかりの武器を手にとった。

「……………」
応見は目を開け、過去の思い出から現実に戻った。

『現実』は二人を収容した牢屋にいた。

朝方だけあって暗闇と静かな寝息しか聞こえてこない。

出入り口前のソファーに身動きもしないで座っていたが、それが動いたのは部屋置くのベッドから僅かな物音を耳にしたからである。

「まさかとは思うが…」

「わつ。応見、驚かすなよ。トイレだ。脱走するわけないだろう」

暗視能力のある応見は、ベッドサイドの照明をつけなくても、それが洵であるのは確認できた。

牢屋の隣に設置された個室があるが、そこから逃げ出す事はここ以上に不可能であった。

まあ、昼間の騒動で脱走することはないだろうが。

応見は過去の思い出に戻ろうとしたが、目を閉じた瞬間、目に見えるのは無残な光景だと気づき、首を振った。

紅子は、こいつら以上に根の優しい子だ。

いつまでも『その物体』を手に入れられないことに焦る同じ星の者達にそそのかされたのは目に見えている。

「……………」
『その物体』を手に入れなければならない。

だから、陽本堯実を襲撃しようとする同朋者たちからの要請を断ることはできなかった。

けれども『その物体』を手に入れられないのは、陽本堯実を悲しませたくないから。襲撃なんてもつての他。

だが、それは自分の存在を否定してしまう。

今、紅子がここにいるのは、それによるものであり。同じ星人達の願い、希望でもあるのだから。拒むことはできない。

だから…阻止したのか。襲撃を失敗に終わらせるため、俺に情報を流したのか。

自分の星、自分自身ほ滅ぼす運命であること。

「……………」

応見は、首を振った。

「馬鹿げている…」

その言葉を漏らしたものの、応見からそれ以上の言葉は出てこなかった。

紅子の行動は間違っているとしても、それ以外の方法が見つけれられないのだから。

「ようやく、自分の行動に気づいたのか？ 応見」

個室のドアを閉めた洵は今の言葉を聞き取ったが、あいにくテレパシー能力などなく、自分の都合のいいように言葉を放った。

応見は、前のめりになっていた上半身を反らし背もたれに預けた。

「残念だが、俺に間違いはない」

「…。ああ、そうですね」

呆れた洵はベッドにつこうとしたが、応見の声がそれを制した。

「一つ、聞いてやろう。お前に陽本堯実の襲撃要請がきたら、どうする？」

『その物体』を手に入れられない事に過敏になっている者の顔が険しくなったが、自制し、嫌々ながら思案を始めた。

「俺ならば、要請した奴を殴るな」

返答はいつのまにか起きあがった格士のものであった。

「お前は聞かなくても、わかる」

と、つつこみをいれた応見は、洵からの返答を聞いた。

それは紅子の行動と変わらなかった。

「ふうん。そういうものか」

と、会話を終了させた。

ベッドサイドの明かりで、応見の表情に気づく者はいなかった。

だからこそ照明を消し、再び就寝の空間に戻すことができたのだ。

闇よりも深く沈んだ応見を知らずに。

『現実には、俺よりも残虐を好んでいる』

応見は首を振ったが、彼の頭の中で浮かぶ映像はなかなか消えてくれない。

釈放

銃口を向けられたものの、爽は生きていた。

ものすごい偶然がなければ、自分自身すら守ることができなかった。

「……ふう」

携帯電話すら話し相手のいない部屋にとじこめられれば、自問するのは当然のこと。

「……こう……」

爽は寝返りをうち、視線を白い天井から白い壁に移した。

紅子は、

彼女は、私より何でもできて、エリートになるのは明らかだった。ただ、孤独で目にする限り一人であるように見えた。物事を表面に出すことはなく、押さえ込むタイプだから、紅子にとって彼女はどんな存在だったんだろう。

68

「応見。あんたにとって、紅子は……彼女はどんな子に見えた」

食事を運んできてくれた時、応見に聞いたことがある。

「俺と同じように見えたな」

彼はそれ以上は語らず、トレイを置くと去ってしまった。

「……」

それは襲撃を阻止した事を思いだし、問いつめられないようにするためか。故人を思い出したくないからかは、わからないけれども。

2、3日の時が流れた。

眠り続ける爽子さんを見守らなければならぬ時と違って退屈を感じなかったのは、自分自身、精神的に疲れていたからだと思う。

「爽。釈放だ」

囚人の様に言う応見の後ろに一人の男がいた。

4、50代の男で、赤に近い茶髪からして爽と同じ星の人だろう。上質のパーツでできた顔は高い地位を表していた。

「爽、預かっていた携帯だ。もう、電源を入れても構わない」

ベッドから降りた爽に携帯を渡すと、応見は男に一礼し退出した。「君が、茶果木爽さんだね」

男は扉が閉まるのを確認してから（もちろん鍵はかけられていない）手を差し出し、爽もそれに応じた。

「私は新しく就任した、赤い星の議長アルハタバイだ」

「は、はあ」

「今回の襲撃事件を巻き起こした連中はガルゼ派の者たちだったが、一掃した。もう、茶果木さんが狙われることはない。安心してくれ」

「はあ…はい」

見えないところで、派閥争いというものがあつたらしい。と爽の頭でも判断できた。

まあ、あれだけ人目につく騒動を起こしたのだから、上の者たちが黙っているわけにはいかないだろう。

「それから、おめでとう」

議長は手を離さないまま、そう言葉を唱えた。

「へ？」

「のぶ、じゆん 廻布紅子の交通事故が認められた。

『特別任務権』の第8案、特別任務者の入れ替えが認められたんだ。だから、君は新しき我が星の希望だ」

時が止まった。

その言葉を聞くまでは、爽子さんと会えるかどうかかわからないが、

また、純粹に接することができると、思っていた。

運良くば、また、バーチャル・ライフ時のようにとはいかないけれども、彼女を世話する仕事ができるんじゃないかと考えていた。

でも、それが、もろくも崩れ去って行ったのだ。

「応見。どういう事よ、これは」

偉い人から解放した私はまっすぐ応見の所に向かった。

応見は、私ができることを知ってか、人気のない…私たち以外誰もいない待合室にいた。

「どうして、紅子が交通事故なのよ」

「いや、聞き違いだ。彼女は、間違いなく交通事故だ」

座っていたベンチから立ちあがり、小さな声で話を続けた。

「確かに、迺布紅子が不穏な動きをすると、情報を聞いて、俺は陽本堯実の周辺で見張っていた。そして彼女は来た。だが、道路を横断中に急発進してきた車に接触、即死した」

しれっとした顔で淡々と語る応见到、手を振り上げずにいられたかった。

乾いた音が響き、応見は僅かによろめいたけれども、反撃しようとはしなかった。

「あんただけは、間違ったことはしないっと思ってたのに…」

そりゃ、冷血で歪んでいるのはわかっているわよ。でも、こんな、汚い真似はしないとってた」

「…」

応見は何も言わなかった。

彼は、私がいる赤い星の偉い人達から賄賂を受け、紅子を事故と唱えたのだ。

それが許せなかった。

多分、今までの。私や紅子たちを物の様に扱っていた大人たちの怒りが加わっていたのは確かだろう。

でも、こんな身近まで汚染が広がっていたなんて。

まだ、信じたくなかった。

「応見。もう一度聞いわ。本当に彼女は事故だっていうの？」

「何度聞いても同じだ。何度でも殴れ。気のすむまで」

「……」

「……」

応見の冷血な態度に、爽の手に力が入ったが、それは実行することとはなかった。

床に視線を落とす、応見の表情に違和感を感じたのだから。

「爽。

あんたが俺のことをどう思おう思っても構わない。

だが、紅子を事故と認めてくれ。彼女は、…確かに、可哀想だった。

だが、中立派でいなければならない俺にとって何もできない。

俺は、ただ管理するだけのロボットだ」

応見は目を閉じて首を振った。

「あんたの星から、この話が持ちこまれた時。最初は、当然断った。だが、気づいたんだ。

この先。また。むごい事件が起こるだろうと。紅子のように、選ばれた人間が物のように散って行く事件が。

星の偉い者たちとって選ばれた者は駒にすぎない、と。

それを俺は、永遠に見届けなければならぬと」

「……」

爽は何も言わず、応見の言葉を聞き、途絶えた後に聞こえてくる静寂を感じ取った。

「別に俺は構わない。感情を消すことができる機械だから、嫌になれば、その記憶を削除できる。

だが、あの人は別だ」

陽本 堯実

「あの人は、永遠にそれを目の当たりにしなければならぬ。」

俺以上に接し、愛情を注いでいるのに。決して報われることはないんだ」

「……………」

「なあ、爽。あんたはどう思う？自分に好意を持っていた者が、突然襲いかかってきたら。」

それが、永遠に続いたら」

「……………」

爽の口が開くことはなかった。

「俺は…あの人を救いたい。」

だが、俺が星の代表として選ばれることはない。俺ができることは『その物体』をあの人から奪い取る人間を見つけることしかできない」

「ちよつと待つて。まさか、それが私だっというの？」

「ああ」

応見はまっすぐ爽の目を見つめた。

「そうだ。俺が長いこと異星人の高校生を管理していた間、お前以上に適格な者はいない」

「そんな事…できるわけないじゃない」

「いや。あんたならできる。洵も格士も優しすぎてだめなんだ。爽、後はお前しかない」

「ちよつ…」

応見の両手が素早く爽の両肩を掴んでいた。

その目は大きく開き、何かを求める子犬のように弱々しものを感じた。

「頼む。」

あの人を救ってくれ。

もう、嫌なんだ。傷つき絶えながらも、それでも、愛情を注ぐ。あの人姿を見て入れない。頼むっ」

冷静な応見が理性を失い、大声で訴えていた。

「頼む…」

うなだれた応見の頭が肩にのしかかった。電車で爽子がしたように。

『あの時と同じく、私は何もできないでいた』

再会

「この中に、あの方がいる」

応見が陽本堯実がいる部屋まで案内した。

乾いたノック音が静寂に包まれ消えていつてから、ドアノブ上にある黒い板に手を当て鍵を解除した。

扉を閉め、さらに内側から鍵をかけてから、応見は爽を連れて進んだ。

「堯実さん、爽をつれてきました」

淡い新緑色のカーペットを踏みしめて進むと右側に卵型の大きな物体、バーチャル・ライフの操縦席があった。

ここで、陽本堯実は爽と同じ姿をしたロボット爽子を操縦していたのだ。

爽は前方にある水色のカーテンが目に入った。

そこに移るシルエットが陽本堯実となる。

「爽。鍵をかけるから、出るときは携帯電話で連絡してくれ」

「私の居場所がバレるのに、大丈夫なの？」

「ああ、ここは、保管庫になっているからな。だが、連絡するまでは電源を消しておいてくれ」

人工知能を持つ浮遊する携帯電話に電源オフ命令を出して、赤い球体を手に持ったとき、後ろのドアが閉まり鍵のかかる音が響いた。その音を確認してから爽は歩み寄った。

「爽子さん……とは、もう呼ばなく鳴っちゃいましたね」

「……………」
そんなに広くない部屋なので、爽の足はすぐにたどり着いてしまった。

「カーテン。開けてもいいですか」

わずかに許可する声が耳に届いたので、カーテンを少しだけずら

した。

隣の部屋にはなかった窓から日差しが、まず目に入った。それから自分が収容されていたしていた物とは比べ物にならない上質のベッドの上にその人がいた。

その人は上半身を起こしていた。

その人が特別任務の重要人物、陽本堯実であった。

陽本堯実は30代ぐらいの人で明るく、元気に笑い。少し気の強そうな、太陽のようなイメージを持っていると爽は判断することができた。

今は推測しなければ見落としてしまうほど、痩せ衰え、その目に力というものはなかったが。

枝のような腕は、一本の赤い棒のようなものをぬいぐるみのように抱きしめ、生き物のようになっていた。

遺品

紅子が愛用した細身の長剣である。

「紅子は、ずっと『ごめんなさい』って、謝っていた…。」

この腕の中で、動かなくなるまで、ずうっと」

力なく途切れ途切れに語る堯実は、主人の血を吸った刃を包む鞘を見つめていた。

そこに紅子がいるように。

「謝る必要なんて、ないのに…あなたは、何も、何も悪いことなんてしていないんだから」

「……………」

この人は…。

この人は、なんて孤独なんだろう。

失踪した婚約者から『その物』を手にしたために。

その『たった一つしかない偉大なる物』を狙う者がいて。

それを手に入れるため、選ばれた者たちがいる。

彼女は、その選ばれた子供たちといなければならぬ。

だが彼女は孤独である故、その子供たちと接してきた。それは孤独な子供たちにとって暖かいものであり負い目でもあった。

心の底から信頼する者が持つ『たった一つしかない物』を盗まなければならぬのだから。

誰が『たった一つしかない物』より大切な彼女を裏切ることができようか。

『孤独』という冷たい体を暖めてあっても、すぐに冷めてしまう。時には凍えてしまう。

なのに

なのに、この人はそれをやめようとしぬい。いや、やめられないのだ。

不意に『たった一つしかない物』を手放せば、ほしがる星々が奪い合いを始め、動乱が起きる。

たった一つしかないから、公平なルールで手に入れよう。そのために作られたのが”特別任務”という名前となり、選ばれた者達だけで競わなければならぬのだ。

だから、特別任務者以外では、手に入れる事はできなかつた。

それに『その物』は、失踪した婚約者の作品であり、彼を捜す手がかりでもあつたから。

婚約者を待つため『それ』を永遠に守らなければならぬ。それを守るが故、孤独でいなければならぬ。

「……………」

だから彼女は孤独を歩まなければならなかつた。

でも、それは限界に達している。

長い沈黙が続いた。

武器を見つめていた爽は堯実の視線に気付いた。

陽本堯実は、涙を流していた。

それは、自分に向けての涙だと判断することができた。

新しい任務遂行者として選んでしまったのだから。

新しい犠牲者として。

「……」

微かな泣き声が爽の耳に痛む。

でも、この人は。堯実さんは、私に僅かな希望を抱いている。

この鎖を断ち切る、大切な『それ』を奪える『裏切り者』になれるよ。」

「……」

爽は、爽子が肩に顔をうずめ、身を預けた感覚を思い出した。

だからだろうか。身を乗り出して堯実さんの肩に顔をうずめたのは……。

「信じてください、とはいえませんが。」

……でも

信じてください」

矛盾した言葉なのはわかっている。

でも、今の爽はそれしか言えなかった。

堯実は紅子の武器から手を放し、爽の頭をなでた。

時が静寂の中へ静かに消えていった。

それから

時が流れた。

その流れていった時の中には、特別任務と呼ばれる争奪戦があり、それはあつという間に幕を閉じた。

『信じて』と言ったものの、私は『その物体』を手に入れることはできなかつた。

手に入れたのは、カナだった。

いや、正確に言えば未来から来たカナ。

それを手に入れた未来を見てきた者が手にとり、そして彼女は『一つしかない物』を破壊した。

その物体を手にした星は破滅を向かえたと言う。

未来から来た彼女は、バラバラになったそれを目にして、狂ったように笑っていた。

星々が喉から手が出るほどほしがっていた物は、最後まで残忍を生む物体でしかなかったのだ。

「……………」
それを失い、真実を目の当たりにした堯見さんの精神状態が悪化した。

でも、もう彼女は孤独ではかつた。

私がいる。洵がいる。カナがいる。

私たちは自分の星を捨て彼女の側を離れない事を誓った。

もう、この大地は凍えてはいない。雪は取り除かれて。春が来る。

私達は、それから解放されたのだから。

それから

私たちは堯実さんと共に、この星を離れることにした。

『その物体』が消えてしまったのだから、腹いせに襲ってくる連中が出てくるかもしれないし。

何よりも、悲しみが染み着いたこの地にいたくはなかった。

いつかは戻ってくるだろうけれども。今は…

「まあ、あんただけには伝えておくわね」

空港ロビーに着いてから、今の事を応見に携帯電話を使い突然の報告した。

「無防備な奴だ。明日の朝には、お前らの搜索命令がでるというのに」

返ってくる応見の声は赤い球体からではなく、振り返った先にいた。

「応見…」

「搜索命令は明日だが、監視命令は出ている。安心しろ、あくまで見ているだけだ」

連合側の手回しの良さに怖いものを感じたが。応見の言葉に不安を取り消した。

「応見…ごめん。期待に応えられなかった」

堯実さんたちから離れたところにいるので、私は素直に謝ることができた。

「未来か…未だに信じられないが。上には上がいるもんだな。まあ、粉々になってくれればいい。あの人に笑顔が戻ってくるならば」

ほっとする応見の笑顔に、私もにこっと笑みを浮かべた。

「そろそろ行くね」

「ああ。二度と、俺に会わないようにしろ。今度は味方としてではないだろうからな」

「…。二度とか」

『じゃあ、言っておくね』と言葉を放ってから…

私は、応見に抱きついた。

「ありがとう」

その言葉を耳元で伝えるため。嫌な奴だけでも、感謝の心はあるから。

「……………」

離れた時、応見が無防備にさらけだした表情に、おもわず笑ってしまった。

「あははははっ。応見、その顔いい。鳩が豆でっぽづをくらったみたいで」

「…、殴られると思ったんだよ。ったく、さっさと行け」

私は、笑いながら走りだし。

仲間たちのところに戻った。

新たなるスタートを始めるため。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1482u/>

未来携帯物語

2011年7月3日00時03分発行